

日付:2015年9月13日／聖書:マタイによる福音書24:1～14

主題:「新聞と聖書」

スイスの神学者カール・バルトの言葉に、「聖書の真理をあなたがたが知りたいと思うのなら、新聞をよく読みなさい。あなたがたがこの世の出来事の真相を知りたいと思うならば聖書をよく読みなさい」とある。聖書の教えは遠い昔話ではなく、個人の宗教的な救い、精神的平安をもたらすもののみでもなく、聖書は、此の世の出来事において常に示唆を与え、生きた言葉として語られるものであるという。

バルトは、ヒトラーの独裁政治に危機感を覚え、ドイツの教会に呼びかけて、1934年5月、ドイツ西部のバルメンにおいて第一回の告白教会全国会議を行い、その会議において「バルメン宣言」がなされた。2つだけ紹介する。「教会がその宣教の源として、神のこの唯一の御言葉のほかに、またそれと並んで、さらに他の出来事や力、現象や真理を、神の啓示として承認しうるとか、承認しなければならぬとかいう誤った教えを、われわれは退ける。」、「国家がその特別の委託をこえて、人間生活の唯一にして全体的な秩序となり、したがって(国家が)教会の使命をも果たすべきであるとか、そのようなことが可能であるとかいうような誤った教えを、われわれは退ける。」

これはいずれも独裁政権のナチス、独裁者ヒトラーをもろに批判しており、彼らの怒りを買うことは目に見えていた。翌年には、ボン大学を追われ、ドイツを去ることになる。バルトは後にこの宣言文を振り返って、一つ大きな落ち度があったことを認めた。それは、このバルメン宣言には、直接的なユダヤ人問題を、言葉として盛り込まなかった事を彼は悔いた。あの時代はそれほどに厳しい時代であったということが伺える。しかし、御言葉をもって社会の不条理に立ち向かうということが出来たことは、戦後のキリスト教界に大きな示唆を与えた。教会が社会に向き合う事の聖書解釈を導いた出来事とも言われている。バルトの弟子であったボンヘッフアーがこんな言葉を残している。「世の荒波に流されないためには、イエス・キリストを礎に据えることである。その中で、その礎に繋がる鎖こそが神学である」と。教会に神学が無ければ、世の荒波にのまれ、流されてしまうということである。

今朝の終末の徴は、社会の現状に目を配ることの大切さを伝えるものである。その秘訣として、右手に聖書、左手に新聞……。それを携え、用いて歩む。そして示されたことを、勇気を持って語り出していく。歴史の先達からそのことを学びたい。(神谷)